

JDR、私も参加しました！

国際緊急援助隊(JDR)は、救助隊員、医師、看護師、薬剤師など、これまで派遣された隊員たちは、何を見てどんなことを

さまざまな職種からメンバーを召集して被災地に派遣する。感じたのだろうか。JDR隊員の6人に話を聞いた。

北海道消防学校

講師
丹野克俊さん

2006年インドネシア・ジャワ島中部地震
医療チーム(医師)



国立埼玉病院

診療放射線技師
倉島勝治さん

2006年インドネシア・ジャワ島中部地震
医療チーム(医療調整員)



松阪地区広域消防組合消防本部

救急救命士
渡部歩さん

2005年パキスタン地震
医療チーム(医療調整員)



兵庫県災害医療センター

看護師
山本裕梨子さん

2005年パキスタン地震
医療チーム(看護師)



海上保安庁横浜海上保安部
災害対応型巡視船いず

主任航海士
寺門嘉之さん

2004年スマトラ沖大地震・インド洋津波災害(タイ)
救助チーム(救助隊員)



警視庁
警備部警備第二課

警備装備第三係長
山川良博さん

2003年アルジェリア地震
救助チーム(救助犬ハンドラー)



医師として迅速な傷の手当てを

も ともと海外での医療活動に興味があり、自分が研修してきた救急・災害医療が災害時にどう生かせるか知りたいと思いJDRに登録しました。ジャワ島中部地震では先遣隊として現地に入り、まずは活動サイトの選定を行いました。現地の空港周辺はそれほど大きな被害が見られずぼとしていたのですが、被災地のバントゥール県に入ると建物は倒壊し、病院の外にけが人があふれ返っていたので、「重症の患者さんにすぐ対応しなければ」と気を引き締め直しました。発災から比較的早い段階で現地入りしたこともあり、崩れてきた天井が直撃して皮膚が裂けていたり、骨が折れていたり、生々しい傷を負った人が次々に訪れました。日中はとにかく暑くつらかったのですが、患者さんたちが元気になっていく姿や笑顔が力になりました。少しですがインドネシア語を覚えて、現地の人と会話のキャッチボールができたとき、とても喜んでくれたことも記憶に残っています。

医療の原点を体験できる現場

自 分の仕事を生かして被災者の役に立ちたい」と思いJDRに登録しました。JDRでは2005年から移動可能なレントゲン機材を携行するようになり、レントゲン技師として派遣されました。活動中、常に頭にあったのは「少しでも痛い時間を短くしてあげたい」ということ。テントの入口には、インドネシア語で「SEMOGA LEKAS SEMBUH(早く良くなりますように)」とメッセージを張りました。また、シーツで仕切って更衣室を作ったり、横になってレントゲンを撮っても体が痛くならないよう、現地でベニヤ板を調達してベッドに体が沈まないようにしたり、少しでも快適に診察を受けてもらえるよう工夫をしました。また、レントゲン写真を撮るだけでなく、地震が起こって元気のない子どもたちに何かできることはないかと思って、彼らの心のケアにもなればと休憩中に手品をしました。国境を越えて多くの人と触れ合い、医療の原点を体験し元気で新しい目標をもらいました。

被災者の心のケアも大切に

2 001年より三重県松阪市の計画で国際貢献が重視され始め、当消防組合もその一環として組織を挙げて救急救命士をJDRに登録させることにしました。実は学生時代、興味があった青年海外協力隊に応募できなかったのが、その思いをかなえるべく、私もJDRに登録しました。被災地では、発電機の整備やテントの設営から、患者さんの血圧・脈拍・体温の測定、隊員の食事の準備まで、幅広く活動しました。すべてが救急救命士の業務とつながっており、これまで培ってきたノウハウを生かすことができました。また問診では、被災でストレスを負った人たちに少しでも安心感を与えられればと、簡単な単語ですが、ウルドゥー語を使いました。そうしたら、皆せきを切ったようにいろいろな症状を訴えてきました。生活習慣、文化、宗教の違いもあり、こちらの思いが伝わらないこともありましたが、現地語でのコミュニケーションは、被災者の心のケアにもつながったのではないかと思います。

JDRの活動を通じて学ぶ

2 003年から兵庫県災害医療センターで勤務するようになってJDRについて初めて知り、「自分の技術を病院の外、そして海外で生かしたい」と思い登録しました。初めての派遣はパキスタン地震のとき。首都の被害は小さかったのですが、阪神・淡路大震災のように、震源近くの山間部に入っていくにつれ、崩れているところが見えてきて衝撃的でした。小学校の校庭にテントを張って1日100人くらいを診察し、腫れている傷口の処置などを行いました。2週間、慣れない環境で戸惑うこと、つらいこともありましたが、ほかの隊員や勤務先の病院スタッフからの温かい励まし、現地の方々の「来てくれてありがとう」という言葉で乗り切ることができました。テントで寝泊まりをしていたのですが、近所の方がカレーを作ってくれたこともありました。JDRの活動や訓練は、看護師として勉強になることが多く、患者さんに対する接し方など、普段の業務にも役立っています。

海上保安庁の特色を生かして

以 前から「職務を通じて国際貢献ができれば」という思いがあり、「いつかは自分もJDRに」と準備していました。航空機を乗り継ぎ現場に出動する様子は、普段の形態と変わらず平常心で臨みましたが、現地に着くと、沿岸部は辺り一面がれきの山。港に停泊していた船が丘に乗り上げるなど、悲惨な状況を目の当たりにし、津波のエネルギーのすさまじさを実感しました。現地の消防隊らと救助活動を行うことがあったのですが、言葉が通じなくても目的は同じ。いつの間にか一体感が生まれていました。また、NGOの方から差し入れをいただき、現地の人の温かさが大きな支えになったことを覚えています。また、離島にヘリコプターや船を使って移動する機会がありましたが、いつもと変わらぬ現場進出手段だったので、機材の積み下ろしなどロジスティックスの面でも経験を生かしたのではないかと思います。今後も海上保安庁の特色を生かし、幅広い救援活動に貢献していきたいです。

救助犬とともに被災者を救う

阪 神・淡路大震災のとき、スイスの災害救助犬の活躍が大きく取り上げられました。警視庁でも救助犬の育成を始めたところだったので、いつか海外の災害現場でも役に立てればと考えていました。JDRに救助犬が導入されたのは、この2003年アルジェリア地震での救助活動からで、私はチーフハンドラーとして、2頭の救助犬を帯同し活動しました。活動サイトは、細かいコンクリートの破片が積み重なり、その下からは、においが出てきにくい状況で、「どこに」「どのタイミング」で犬を入れるかに神経を使いました。救助犬にとって、海外で活動するのは初めてのことで、長時間のフライトも心配でしたが、現地に着くといつもと同じように力を発揮してくれました。また、厳しい環境の下で活動する隊員、被災地の人たちにとって、救助犬は心の癒やしにもなっているようです。これからもJDRのメンバーとして、救助犬とともに一人でも多くの命を救うことができたいと思っています。